



インターンシップの事前説明

大学におけるインターンシップは、学生が企業等において実習・研修的な就業体験をする制度のことで、学生が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行うものです。インターンシップを通して、学生が自己の職業適性や将来設計について考える機会となり、主体的な職業選択や高い職業意識の育成が図られ、就職後の職場への適応力や定着率の向上にもつながるものです。

- 主に徳島県内企業へのインターンシップ
- 大学経由型インターンシップ
キャリア支援室を通して応募する、主に公的機関が実践するインターンシップ
- COC + 実践力養成型
インターンシップ
県内企業や団体等が抱える課題に対して、受入先と学生が共同してミッションの達成を目指す課題解決型の実践型インターンシップ
- 自由応募型インターンシップ
学生が個人で受け入れ企業を探して、応募・参加するインターンシップ
- 学部・学科で紹介している
インターンシップ



徳島大学では、学生に対する職業意識・職業観の育成、自己の職業適性・将来設計を促すためのキャリア教育の充実が重要と位置付け、自治体や地域企業とのインターンシップを促進しています。

ここでは、徳島大学におけるインターンシップについて紹介します。

1 インターンシップとは？

徳島大学では、総合科学部、理工学部、生物資源産科学部等でのインターンシップを授業科目として

ており、学生が夏休み等を利用して企業や官公庁等で就業体験を行う機会を設けています。また、企業や業界への理解を深め、進路を考えるうえでの参考とするため、授業以外でインターンシップに参加する学生の数も年々増加傾向にあります。

期間は、1日だけのワンデーインターンシップから、数週間、それ以上に渡るものなど様々ですが、総合科学部及び理工学部の「短期インターンシップ」の授業では5日間以上の参加を原則としています。内容も、業務説明や社内見学が中心の企業見学型、グ

ループワークなどを中心とした企業研修体験型、実際の現場での体験を行う労働実践型など、受入先により様々です。企業のインターンシップへの関心も年々高まっており、受入企業も増加しています。

2 インターンシップに行くメリット

- 業界・企業に関する生の知識・情報を入手することができる。
- 仕事理解、職業意識の育成につながる。
- 自分の将来やキャリアについて意識する動機付けになる。

- 就職活動でのミスマッチを防ぐ。
- 就職活動に先立って、応募、履歴書作成、選考などを体験することができる。
- 社会人としての必要な常識やマナーについて理解することができ
- 社会人基礎力の向上の機会となる。

3 大学内で紹介しているインターンシップについて

- キャリア支援室提携インターンシップ
- キャリア支援室が紹介する、

特集 ① 徳島大学のインターンシップについて

学生支援課



4 キャリア支援室の相談体制

● 長期インターンシップ

就職活動の主役は学生であり、インターンシップは、就業体験を

通して、自身の適性や能力、将来のキャリアビジョンを形成し、自身の進路を考えるうえでの貴重な経験ができる制度です。

また、キャリア支援室では、インターンシップに関する支援以外にも、就職活動やキャリア形成に関する様々な支援を行っています。

5 キャリア支援室での支援内容

- キャリア支援室提携インターンシップの案内・受付
- 大学経由型インターンシップの案内・受付
- 就職相談、キャリアカウンセリング
- 履歴書やエントリーシートの添削、面接練習
- 求人票の紹介、閲覧
- 就職ガイダンス、セミナー、企業説明会の開催
- 就職活動DVD、新聞の閲覧
- 就職活動に関する図書貸出
- 企業パンフレットやセミナーチラシなどの配付



就職相談、キャリアカウンセリング



学内合同企業説明会の様子

徳島大学COCプラス事業 実践力養成型インターンシップ



COCプラス推進本部
アンシエイトコーディネーター
宮本 紀子（みやもと のりこ）

徳島大学では、平成27年度から、文部科学省COC+事業「とくしま元気印イノベーション」人材育成プログラムの一環として、「寺子屋式インターンシップ」の開発に取り組んでいます。

寺子屋式インターンシップとは、企業側にはメンターを、大学側にはドン（学内メンター）を配置し、相互が密に連絡を取り合い、事前学習から事後の振り返りまで「課題・レポート・ディスカッション」を繰り返す、課題解決型インターンシップを指します。

本年度から、正課の教養教育科目となった「実践力養成型インターンシップ」は寺子屋式インターンシップのうちの一つであり、事前学習から事後の振り返りまで、約半年間（うち実活動日数約30日間）に渡り企業の経営課題の解決に取り組めます。本インターンシップは、受入団体担当者と学生、ドン（学内メンター）が一つのチームメ

ンバーとなり課題解決に取り組むことによって、職業人意識とコミュニケーション力を大きく飛躍させることを目指しています。平成28年度には、7つの受入機関で35名の学生が、平成29年度には15の受入団体で54名の学生がインターンシップに取り組みんでいます。

実践力養成型インターンシップ 活動事例紹介

篠原 諒子さん（総合科学部4年生）は、昨年度、実践力養成型インターンシップに参加し、4年生になった今年度は、自らインターンシップのプロジェクトを立ち上げました。

徳島大学のサテライトキャンパスである『徳島大学地域創生センター上勝学舎』でのインターンシップに参加し、『上勝町八重地集落にあるかやぶき民家の有効的

な活用方法を提案する』というプロジェクトに取り組みました。

4年生になり、就職活動をする中で、次第に「働くとはどういうことか」疑問を抱き始めたそうです。そんな中、徳島県で施設管理運営、イベント企画運営等の事業を展開している企業の社長と話をする機会を得て、自らのやりたいことと社長のやりたいことが重なり、互いにwin-winになる部分でインターンプロジェクトを考え、企業へ企画を持ち込みました。

「働くとは何か」を考えるプロジェクト。

大学生と社会人双方にアンケート、ヒアリングを行う中で、学生にとっては社会に出る前に働くことについて考えるきっかけを、企業にとっては、学生と関わることで今後の社内の人材育成の在り方や企業の発展・成長の一つのきっかけとなることを狙って、今回のプロジェクトが開始しました。

インターンは、プロジェクトに共に取り組むメンバーを集めることからスタートしました。チラシ作成、学内広報活動を経て集まった4名のメンバーと共に、大学生とインターン先の社員双方にアンケート、ヒアリング調査を行いました。

その結果をまとめ、企業向けの報告会を実施するとともに、この経験を自分たちだけの学びとせず、これから就職活動に臨む後輩たちにも知ってほしい、との思いから、キャリア支援室主催の業界・企業研究セミナーの一部で、インターンの活動報告という形で自分たちの経験と気づきの共有を後輩たちに行いました。

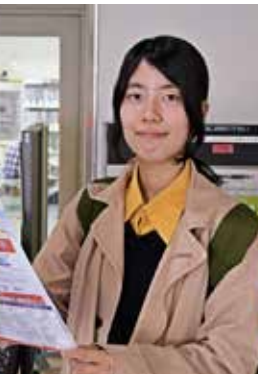
社員の方へのヒアリングや、チームでプロジェクトを進める中で「働くとは社会とつながることであり、働くことは一人ではできない。必ず仲間や相手がいて、事を成すにはコミュニケーションが

大事になる。その時々や相手に応じた自分の立場を使い分け、相手によって伝え方を変えること、伝えるために必要なものの言い方をすることが仕事をする上で重要なコミュニケーションスキルだということに気づいた」と篠原さんは言います。

人材育成にも力を入れておられた今回の受入企業側の担当者の方からは、「今回のインターンシップは、目に見える結果以上に『過程』に価値があった」、「次年度以降もヒアリング式のインターンシップの導入を検討している」との言葉をいただき、学生からの企画持込型のインターンシップに対する好評価を得ました。

なお、篠原さんはインターンシップに取り組む過程で、インターン先の企業から内定をいただき、今春からはインターンシップでお世話になった社員の方々と共に働く予定です。

キャリア支援室提携 インターンシップ



総合科学部人間文化学科3年生
加川 怜子（かがわり りょうこ）
インターンシップ先…
株式会社エフエム徳島「5日間」

企業の説明会があり、希望をかなえるために履歴書を作ったり、面接を受けたりと、インターンシップは就活の練習にもなるようです。

加川さんのインターンシップは昨年8月の5日間、初日はスタジオ見学や放送機器の説明。番組の企画案も考えました。

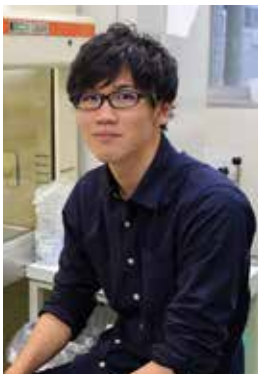
ちょうど阿波踊り、お盆の特番期間と重なり、中継車に乗り込んでレポートとあちこち出かけたり、公開生放送などの手伝いも。

「短い期間でしたが、中身の濃い経験をさせていただきました。アナウンサーの方が一人で、車の運転から放送機器の操作までやるんですね。人と話すのはそんなに苦手ではないのですが、とっさに相手を見つけておしゃべりに引き込んでいくのって素晴らしいなあと思いました。インターンで職業への固定概念のようなものもなくなるんじゃないでしょうか」

最終日にはレポートとともに 企画案の発表も

「ネットなどでいくら調べても現場の雰囲気はわからないので、インターンシップは貴重な体験になりますね」

大学経由型 インターンシップ



薬学部薬学科5年生
中山 卓（なかやま たくしる）
インターンシップ先…
神奈川県庁・茨城県庁「各一週間」

「音楽が好きなので、徳島に根付いたジャズのセッションの企画を提案しました。企画を実現するには、学ばなければならない課題も

たくさんあることを知り、良い勉強になりました」といふ加川さん、さらに別の業種への挑戦にも意欲满满です。

「県庁や保健所、研究センターでは薬事衛生や環境衛生、食品衛生など幅広く薬学で学んだことが生かせ、仕事の幅が広いことが魅力に感じました。僕は色々なことをやってみたいと思っているので、ジェネラル（広範囲に知識を持ち、様々な分野・部署で活躍できる人）に働けるといいうのも公務員を目指す理由の一つです」

地域住民の健康や安全に貢献 東日本震災をきっかけに薬学へ

薬学部で公務員志望という中山さん。

高校までは陸上部一筋。オリンピック選手をめざしていましたが、世界への道はそんなに甘くはありません。

高校2年の時、東日本大震災を機に薬剤師の仕事に興味を持ちました。そこで薬学部という、まったく考えてもなかった違う分野に挑戦することを決意。

「今年、病院と薬局でとても有意義な実習をさせていただき、臨床での薬剤師の仕事の魅力を感じることができました。今後は一般企業のインターンにも参加し、それぞれの職種をしっかりと理解し、後悔のない就職活動に繋がられればなと思っています」

茨城と神奈川の県庁で、 それぞれ一週間

「インターンではどちらの担当者の方も親切で、様々な業務に同行させていただき、とても充実した2週間となりました。公務員としての業務は県によってさほど違いはないだろうと思いき、今回は住みたいと思っている2つの県のインターンに参加させていただきました。実際に行ってみると、行政の業務もその地域の人口や産業によって異なり、薬剤師の仕事も少しずつ違ってきていましたので、住みたい県ではなく働きたい県として二つの県を見ることができるようになりました。インターンシップに参加することで将来自分がどんな仕事・生活がしたいのかを深く考え直す事ができました」

今後の目標や予定は

「今年、病院と薬局でとても有意義な実習をさせていただき、臨床での薬剤師の仕事の魅力を感じることができました。今後は一般企業のインターンにも参加し、それぞれの職種をしっかりと理解し、後悔のない就職活動に繋がられればなと思っています」

研究型 インターンシップ

大学院先端技術科学教育部博士前期課程2年生
坂本 裕輝 (さかもと ゆうき)
インターンシップ先…埼玉県理化学研究所「約3ヶ月」

坂本さんの場合は、自分の希望する研究テーマを行っている機関を探してインターンシップを申し込むという方法をとりました。これには大学や相手方を動かすという、熱意と様々な手続きが必要となります。

坂本さんは1年の時にも理化学研究所に行っています。

指導教員の先生と長期インターンシップ支援室の先生に気持ちを伝えたら、背中を押してくれ、アドバイスももらえ、理化学研究所の先生からは『一度お会いしましょう』との返事が。訪問の結果、インターンの許可が下りました。

相手方から許可が下りたら誰でも行けるわけですが、自分では企画書や経費の計算など、また支援室の先生にも様々な書類を作成してもらおうという作業も必要になります。

「こちらの意欲も必要ですが、支援室の先生が二人三脚で親身に

取り組んでくださったので実現できました」

坂本さんは、アルミニウムのナノ構造体で「色」を作る研究をしています。理化学研究所では、メタマテリアルというジャンルの研究室に。

「今まで青緑色の鮮やかな色を作ることが難しかったので、それに取り組みました。同じ研究の人はいませんでしたが、同じジャンルで実験している人が集まり、ミーティングなどでは有意義なアドバイスももらえました。私は実験

中心というより数値計算でやっているの、スーパーコンピュータが使えたというのも魅力でした。解析のためのプログラムを一人で作って、マニュアルとともに置いてきました」

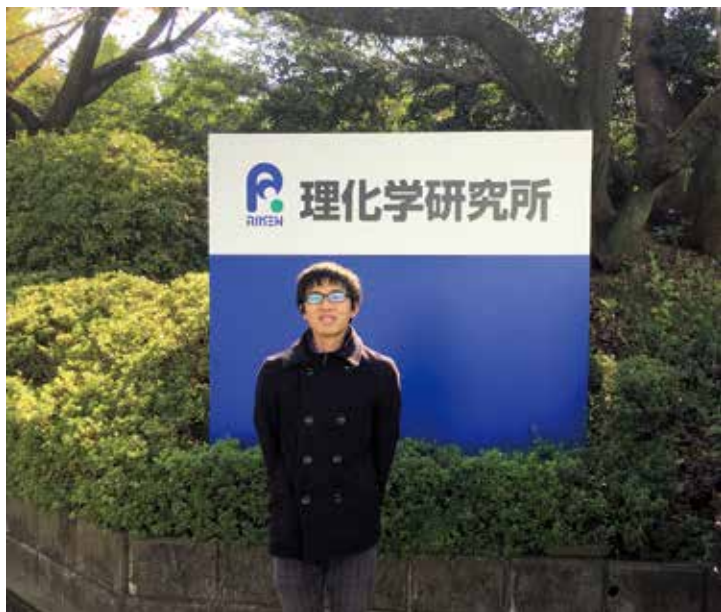
そんな坂本さんは公務員として就職が内定しています。

「就職先は研究とは関係ありませんが、先生からは『頭を柔らかくし、物事をいろんな視点から見る』ということを学ばせていただいたので、今度は市民の皆さんのために、そういう仕事の仕方を生かしていきたいと思います」

インターンの収穫は

「私の行った研究室は海外の研究者が多かったため、語学の勉強にもなりました。また大人の方と話せることは視野も広がりましたし、仕事の進め方なども勉強になりました。面接の時に、他の学生よりしっかりしていると聞いていただきました」

インターンシップ制度、どんどんチャレンジした方が良いみたいですね。



正門の前で



研究員の方々と(左端)



理研の食堂メニュー



田中先生とディスカッションをしている様子